『國民新報』1940年2月4日

[主張]　誠心の紀元節

　年のは二千六百のである。一のとを一つにして、のとにまりなきをぎたてまつるである。

　二千四百萬も、にしてより三十とふもののにれば々一であつた。三十年とふのはくれて、び一になつて三十年とふことである。ちるにいては、はしくにはつたともへるが、のにいてはにつたのであつて、のをにこのをとすべきである。のでもなく、でもなく、であるとふにひり、それにふさはしきととをつべきである。

　かくすることにいて、は、とか、とかふ、せせこましいからして、とふ々としたがのある一になるのである。これはからなしてれるのではなくて、でなるのである。はなり、のなりとをてするに、なるのである。

　しながら、なほのをせざるものは、それこそをし二千四百萬をし、いて、をするものとふべきであつて、にのの、紀のとはねばならない。

　しかのみならず、はのなり、はれてのなりとのびはから發せられるものでなくてはならない。の參、の、、のてからづるものでなくてはならない。それが、にうはべであつたり、であつたり、であつたり、このりであつたりしてはならない。なんとなれば、それはをきをき、のをはることになるからである。

であるから、のをば、々はののにしよう。から、のから、にをひ、をるにをてせんことをはう。にのにいても、を一して、にぢず、にずるのののをさう。して二千六百年より、には、にはいつはりはなかつたとにせしめよう、二千は六百年より二千四百萬はにり、にのとなりつた、とにせしめよう。

よ！